

昭和 42 年度 土木学会誌掲載懸賞論文を募集します

土木学会誌編集委員会では、明春新年号（第 53 巻第 1 号）掲載の下記論文を懸賞募集致します。各位研さんのうえより多く応募されるようご案内申し上げます。

土木学会誌編集委員会

記

1. 主題および論文内容

(1) 一般の部

専門の分化と総合

第 2 次大戦後のわが国の経済の発展状況は、一部に覆うことのできないひずみを残してはいるものの、世界の注目を集めるにたる大いなる実績として、新しい歴史を刻みつつあります。驚異の発展をなしとげたわが国の国民生活は、それにつれて向上し、いわゆる文化生活は国民の日常に大きな変化をもたらしつつあります。社会活動が活発化すれば、それにつれて公共基盤の拡充が求められ、結果としてわれわれ土木技術者に多大な生産活動を要求することとなりました。土木技術者の活躍する舞台の増大は、それに対処するために技術革新を求め、技術の専門化と高度化を助長して今日に至りました。一方総合工学としての立場を社会から求められる土木工学にあっては、常にこの相反する二者の要求を満たさねばならない宿命をにない、充実した生産活動と同時に、前二者の融合は至上の案件でもあります。各位におかれましては、相矛盾する分化と総合に焦点を合せ、教育、技術者の自覚、組織等々の各視点、あるいは別の観点から研究され、より建設的な提言をなされんことを願います。

(2) 学生の部

21 世紀の土木技術

夢を語ることは若人の特権とされています。そしてより建設的な若々しい夢は、総合工学といわれる専門に進まんとする者にとって欠くことのできない、基本でもあります。学会誌編集委員会では、会誌第 50 巻第 1 号で、その夢について特集を試みましたが、それはある意味では今日の延長であり、実用化の近い夢でありました。今般募集することになった本件は、標題に示すとおり 21 世紀の土木技術に焦点を合せ、その期待される未来像について、より充実した試論を試みていただきたいと思います。各論、展望等その記述内容は問いませんが、より科学的な展開を希望します。

2. 応募資格

土木学会名誉会員、正会員、学生会員に限ります。

3. 応募要領

応募者は一般の部（学生会員の応募も可）、学生の部（学生会員のみ）のいずれかの主題を選び応募して下さい。一人 1 編のみ応募できます。応募に際しましては、氏名、年令、生年月日、勤務先（または学校・学部名）、同職名、自宅住所、電話番号、会員資格を明記した原稿用紙大のメモを添付して、土木学会土木学会誌編集委員会懸賞論文係まで書留便にて送付して下さい。

4. 原稿用紙および制限枚数

横書き 400 字詰原稿用紙を使用、最高 20 枚までにまとめて下さい。

5. 原稿締切

昭和 42 年 10 月 15 日（厳守のこと・郵送の場合は、10 月 12 日の消印まで有効）。

6. 審査および発表

土木学会誌編集委員会が審査をなし、審査結果を会誌第 52 巻 12 月号に発表、あわせて上位入賞論文を各部門 1 件ずつ会誌第 53 巻第 1 号に掲載します。

7. 賞

一般の部、学生の部各部に対し、おのこの

一 席（1 名）：本賞と副賞 3 万円

二 席（1 名）：本賞と副賞 1 万 5 000 円

三 席（2 名）：本賞と副賞 5 000 円

以上

土木学会誌(第53,54巻)表紙デザインを募集します

土木学会誌編集委員会では、明春から使用する会誌の表紙デザインを広く募集することとしました。より親しまれる会誌をと願っての企画でございます。各位ご研究のうえ、下記募集要項にしたがって応募下さいますよう公告致します。

土木学会誌編集委員会

記

1. 募集件名

土木学会誌第53,54巻に使用する表紙デザインおよび背表紙デザイン。

2. 作品内容

B5判原寸のケトン紙を使用、黒色の外に1色、計2色でデザインする。提出に際しては、厚紙台紙にはりつけていただく。

3. 文字

土木学会誌、1~12月号を表わす数字の表紙、背表紙に入る位置、および字体・大きさ。但し、法制上必要とされる文字は別途印刷工程で挿入します。なお、使用文字は写真植字を使用してもかまいません。但し、背表紙デザインにあっては、特集題名の入るスペースを設けること。

4. 審査

土木学会誌編集委員会が組織する審査委員会。

5. 賞

入賞(1件)

賞状および副賞4万円

佳作(5件)

賞状および記念品

6. 締切および発表

昭和42年8月20日締切(同日の消印まで有効)。会誌第52巻第10号に発表のうえ採用の予定。

7. 作品送付先

書留便にて土木学会誌編集委員会宛送付して下さい。

8. 備考

- (1) 入賞作品の著作権は作者に、版權は土木学会に帰属するものとします。
- (2) 名誉会員、正会員、学生会員外の応募作品は受付けません。
- (3) 使用色、実施デザイン、その他につき、委員会の意向により、専門家に委嘱して一部修正を加えることもあります。
- (4) 応募作品は原則として返却致しません。

以上



中国四国の工 トピックス

—中国四国大会によせて—

土木学会第 53 回通常総会と第 23 回年次学術講演会は、本年 5 月 26 日から 28 日にかけて広島市で開催され、多数の参加者を集めて、盛会のうちに無事終了した。総会および講演会開催を記念して、ここに中国四国地方の土木工事を中心に、その一部を紹介する。

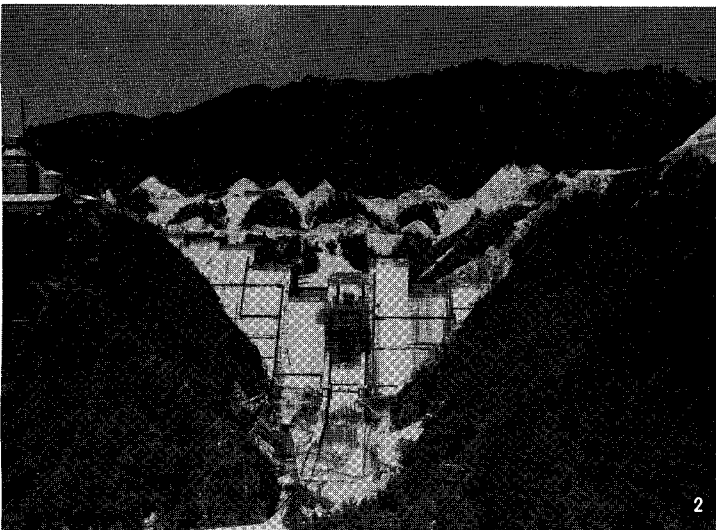
写真説明

1. 太田川放水路

放水路（写真右端）は昭和 7 年度から着工し、まず福島川下流部を開削、築堤護岸等の施工を進め、昭和 17 年度までに左岸は福島町、右岸は己斐町まで施工した。

戦争中の中断を経て昭和 21 年度から工事を再開、昭和 26 年度には用地買収も軌道にのり、祇園町長東地先から本格的な掘削に着手した。

その後工事は順調に進み、昭和 40 年度末までに、分派口の放水路可動せき（祇園水門、写真中央手前右側）および本川側分水せき（大芝水門、写真中央手前左側）等の分流工事もそれぞれ完成した。



2. 菅沢ダム

日野川（鳥取県）の上流につくる多目的ダムである。

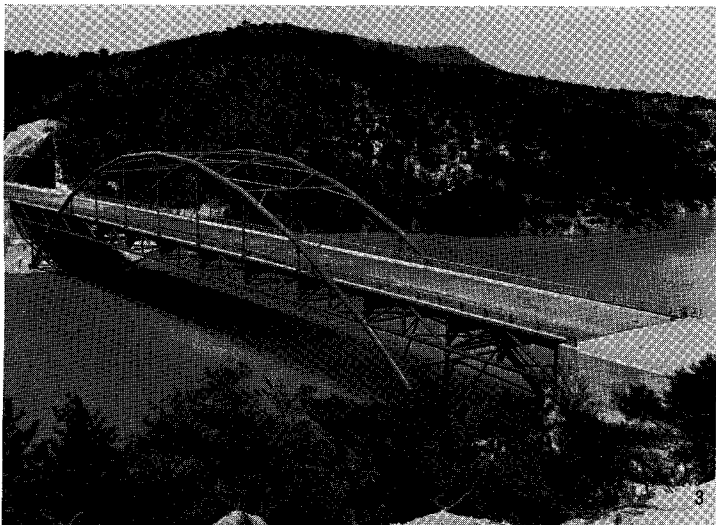
本写真は 10 月初旬湛水を目途にコンクリート打設最盛期のダムの状況を下流よりみたもので、現在 170 000 m³（全体で 196 000 m³）のコンクリートを打設している。

型式：重力式コンクリートダム、堤高：73.5 m、堤頂長：210.0 m、堤体積：196 000 m³、総貯水量：19 800 000 m³

3. 伊達橋

玉野バイパスの岡山県玉野市田井地点にある伊達池に架設された橋梁で、橋体はほとんどパイプで構成された中路橋である。

型式：ランガートラス、橋長：110 m、幅員：9.5 m、事業費：7 270 万円、着工：昭和 41 年 4 月、完成：昭和 42 年 3 月



4. 安芸大橋

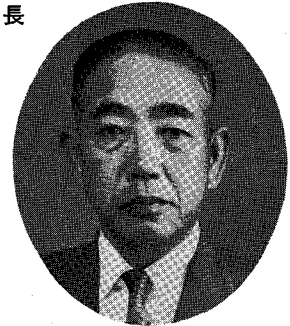
広島市郊外、一般県道府中祇園線が太田川を横断する地点に架設中の日本初のニールセン形式ローゼ桁橋で、下弦材の架設を終り、ロックドコイルロープ（C 型、径 38 mm）の縦弦材の取付が終了した所である。

橋長：364.80 m、幅員：6.0 m、2 等橋
着工：昭和 39 年、完成予定：昭和 42 年度

5. 亀崎せきおよび亀崎橋改築工事

広島県安佐郡高陽町・大田川左支川三篠川筋亀崎せきおよび亀崎橋改築工事で、左岸せき体工が完了した所である。

会長



富樫 凱一

日本道路公団総裁

専務理事



羽田 巖

社団法人 土木学会



市原 松平

名古屋大学教授



岩崎 敏夫

東北大学教授



高石 康

電源開発㈱土木試験
所長



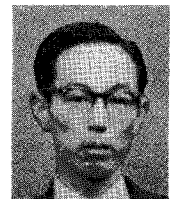
高橋 浩二

日本国有鉄道建設局
計画課長



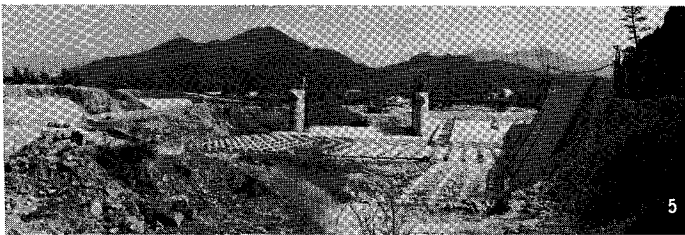
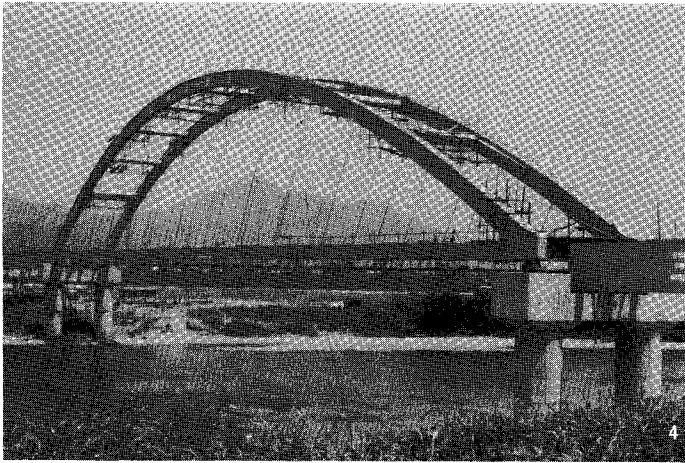
吉田 登

関西電力㈱支配人



渡辺 隆二

建設省河川局治水課
長



①. 工事内容

亀崎せき／本体：97.15 m，基礎：井筒基礎，内扉：鋼製ローラーゲート2門，高さ20 m，長さ22.09 m

亀崎橋／橋格：2等橋，橋長：96.5 m，幅員：3.0 m，型式：4径間活荷重合成鋼桁橋

②. 事業費：1億3600万円

③. 工期：昭和41年12月～昭和43年3月

6. 三条川復旧工事

広島県安佐郡高陽町，太田川左支川三條川は，昭和40年6月出水で大災害を受けたが，復旧工事も順調に進んでいる。

7. 神原上橋

国道53号線の改良工事にともない，福渡町下神目地点の誕生寺川に架設されたR=120 mの曲線桁橋である。

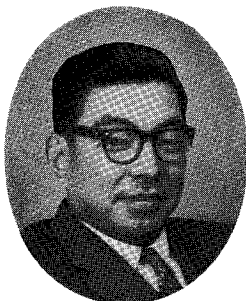
型式：非合成単純箱桁橋，橋長：55 m，幅員8.5 m，事業費：4600万円，着工：昭和40年4月，完成：昭和42年3月

役員紹介

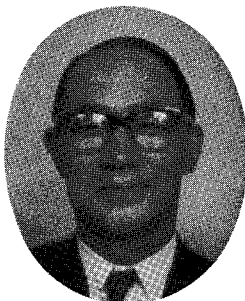
副会長



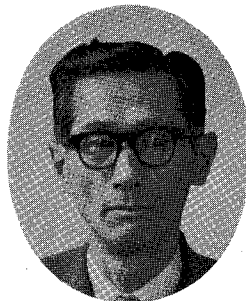
酒井 忠明
北海道大学教授



仁 杉 巖
日本国有鉄道常務理事



松見 三郎
中日本建設コンサル
タント㈱副社長



最上 武雄
東京大学教授

理事



粟田 亀造
名古屋市土木局長



伊藤 富雄
大阪大学教授



飯吉 精一
鉄建建設㈱専務取締役



石井 興良
東京都建設局長



石橋 多聞
東京大学教授



川崎 敏視
日本鉄道建設公団計
画部計画課長



神田 九思男
建設省九州地方建設
局長



倉橋 力雄
北海道開発庁地政課
長



米谷 栄二
京都大学教授



堺 毅
日本大学教授



篠原 謹爾
九州大学教授



広瀬 可一
首都高速道路公団神
奈川建設局長



福山 真三郎
大阪市総合計画局長



村田 清逸
中国電力㈱土木部長



森本 茂男
運輸省港湾局防災課
長



横戸 実
建設省東北地方建設
局企画室長



横道 英雄
北海道大学教授

監事



渡辺 豊
建設省四国地方建設
局長



小池 誉
西松建設㈱常務取締
役



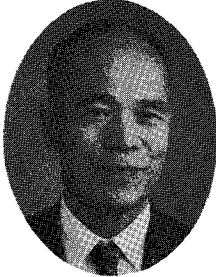
橋 好茂
㈱鴻池組常務取締役

土木学会名誉 会員推挙報告

土木学会中国四国大会において、下記の四名の方々が土木学会名誉会員に推挙されましたのでご報告申し上げます。ここに、土木学会名誉会員は65名(昭和42年5月現在)をかぞえることになりましたことを、あわせてご報告申し上げます。

(五十音順・敬称略)

うちばやし たついち
内林達一



大正 10 年 3 月 九州大学土木科卒業
その後 内務省に奉職
大正 12 年 4 月 内務省下関土木出張所勤務
昭和 7 年 4 月 山口県下関漁港修築事務所長
昭和 14 年 3 月 東京府京浜運河建設所長
昭和 18 年 3 月 運輸省港湾局工事課長
昭和 20 年 3 月 運輸省第四港湾建設部長
昭和 21 年 11 月 株式会社水野組に入社
専務取締役となり現在に至る。

土木学会としては
昭和 37 ~ 38 年 評議員
昭和 39 年 中国四国支部長
昭和 40 ~ 41 年 土木学会理事
として土木学会の運営に貢献せられた。

おおつばま くとろう
大坪喜久太郎



大正 11 年 3 月 九州大学土木科卒業
大正 14 年 7 月 北海道大学助教授
大正 17 年 5 月 北海道大学教授
大正 17 年 5 月 工学博士の学位を受く
大正 21 年 3 月 室蘭工業大学学長に就任現在に至る。

この間 欧米へ出張3回、日本学術会議会員、北大大学院工学研究科長、北大名誉教授となられた。

土木学会としては
昭和 14、15、16 年の3ヵ年間北海道支部幹事長
昭和 23 年支部長として学会の運営に尽力せられた。
また、昭和 14 年には水工学の研究に対して、土木学会土木賞が授与された。

ふくだ たけお
福田武雄



大正 14 年 3 月 東京大学土木科卒業
大正 15 年 5 月 東京大学助教授
昭和 7 年 12 月 東京大学教授
昭和 26 年 3 月 東京大学生産技術研究所併任
昭和 33 年 5 月 東京大学生産技術研究所長
昭和 38 年 停年退官、名誉教授となる。

その後、千葉工業大学教授、構造計画コンサルタント社長として現在に至る。

土木学会としては、
昭和 17 年~18 年 土木学会理事、
昭和 27 年~28 年 土木学会副会長、
昭和 39 年 土木学会第 52 代会長として、
またその他多数の委員会委員長として学会の運営に貢献され、昭和 8 年には、格子の理論で土木学会土木賞を受けられた。
主な著書として、ラーメン、鉄筋コンクリート理論、構造力学、差分法、橋梁工学等がある。

みやもと たもつ
宮本保



大正 9 年 7 月 東京大学土木科卒業
のち鉄道省に勤務
大正 12 年 5 月 鉄道技師
その後 東京鉄道局、本省建設局、東京建設事務所を経て
昭和 15 年 8 月 建設局 線路課長
昭和 17 年 11 月 仙台鉄道局長
昭和 19 年 7 月 陸軍司政官としてビルマに渡られたが
昭和 20 年 9 月 鉄道監として復帰
昭和 21 年 12 月 退官

その後 仙鉄工業(株)社長となられ、現在、東日本コンクリート工業社長として現在に至る。

土木学会としては
昭和 29、30 の両年東北支部長として学会の運営に尽力され、現在も顧問として尽力されている。